



本日はよくお参り下さいました

お彼岸を過ぎ、やっと暑さから解放されると思いきや、まだまだ暑さ厳しき今日この頃ですね。境内では少し遅く彼岸花が満開を迎えています。天神社では、9月24日に氏子会役員参列のもと九月の小祭が行われました。このお祭りは、氏子崇敬者の皆さんのご多幸や、地域の繁栄、国家の安泰を祈るためのお祭りです。こういったお祭りには、私達日本人が、自らの願望や欲求を果たすより先に、周囲に気を配り、思いやる心を大切にしていることが表れているように思います。



さて、余談ですが、100組以上の仲人をして、「一度も離婚していない」という方にどうやって男女を選んで引き合わせているのか」というブライダル雑誌の取材に、次のように答えていたそうです。『相手が女性なら誰でもいい』『相手が男性なら誰でもいい』と考えている男女だけを引き合わせています。』どうやら自分で好きな人を追いかけて結婚にこぎつけた「自我を通し、自分が中心にある結婚」はうまくいかないことが多いようです。この話から見えるのは自我を抑えることの大切さは、人間関係、社会関係においても大切なのではないかということです。嫌いなことも、許せないことも、人は時間をかけてそれを乗り越え、感謝することができるといいます。「笑門には福来る」と同じ発想で、感謝の気持ちは感謝した分だけたくさんの感謝したくなる出来事を運んでくれる、そう思うと気持ちが少し楽になりそうですね。今月も皆様のご多幸をお祈り申し上げます。権禰宜道子

10月

1日・15日 月次祭(つきなみさい)皇室の弥栄と国家の発展、氏子・崇敬者並びに社会の幸福と平和を祈る。

8日 寒露(かんろ) 寒露とは、晩夏から初秋にかけて野草に宿る冷たい露のことをさし、秋の深まりを思わせる。この頃になると、五穀の収穫もたけなわで、農家では再び、ことのほか繁忙を極める。山野には晩秋の色彩が色濃く、はげの木の紅葉が美しい。朝晩は肌にそぞろ寒気を感じ始めるように。雁などの冬鳥が渡ってきて、菊が咲き始めおろぎが泣きやむ。

10日 体育の日 スポーツにしたしみ、健康な心身をつちかう。東京オリンピックが開催された日にちなんでいます。



秋祭りの季節。全国各地で行われます。

17日 神嘗祭(かんなめさい)皇室の大祭で、その年に収穫した新しい米で作った新酒と神饌とを伊勢神宮に奉る儀式。「なめ」は「かみのあえ=神の響(あえ)」が変化した語という説や、新穀を意味する「贄(にえ)」の変化だとする説もある。

23日 霜降(そうこう) 秋も末で霜が降りる頃という意味から霜降という。この頃になると、秋のもの寂しい風趣がかもされてきて、早朝など所によっては霜を見るようになり、冬の到来が感じられてくる。小雨が時々降り、楓や蕨が紅葉し始める。秋の季節の最後の二十四節気。

天神さまの豆知識

— ものけと神道 —

神道ではものけ、妖怪、幽霊といったことはあまり語られることはありません。しかし、日本史には妖怪や怨霊が登場する記録が多くみられます。幽霊ならだれでも知っている妖怪や怨霊、幽霊、お化け。それぞれイメージは違いますが、このような人知を超えものを「ものけ」と呼び、参考文献をもとに日本人との関係を簡単に見てゆきたいと思えます。▼「お化け(妖怪も幽霊怨霊も、霊魂を持つ存在である。そして人間も、霊魂を持った生き物である。そして日本人は「精霊崇拜」と呼ばれるこのような発想の上に生きていた。この考えは、長く日本人の思想の底流となってきた。ゆえに明治維新の直前のころの人々の大部分はこう考えていた。▼「日本は、人間と物怪(ものけ)とがともに生活する国である。」



▼ものけは人間にないさまざまな能力をもっているが、平素は人々の前に姿を見せない幽霊のように、特定の人間にしか見えないものものけもいる。かれらは、自分の氣にいった人間にこれこれ手助けをすることもある。しかしものけを怒らせると怖い。かれらが怒りにまかせて、天災を起こしたり、人を病気にして死にいたらしめたりするからだ。▼日本人が全て、天照大御神や大国主命のようによく知られた神だけを信仰しているのではない。河童、天狗、鬼といった妖怪を祭神とする神社もある。▼神道はあらゆるものを神としてまつる宗教である。人間にも、動物にも、器物にも霊魂が宿るとされる。さらに、自然界には数え切れないほどの目に見えない霊魂がいる。そのような自然界の霊魂が力を合わせて風を起こしたり、雨を降らせたりするとされるのである。参考文獻『日本人ならしっておきたい「ものけ」と神道』武光誠著 株式会社河出書房発行

お祭り歳時記

時代祭り

十月二十二日

京都市左京区岡崎 平安神宮
京都御所建礼門前から平安神宮応天門までに行われる時代行列の祭り。明治二十八年、平安遷都一〇〇年を記念して、平安神宮が創建され、その記念祭として行われるようになった。山國隊の奏する笛、太鼓の音色を先頭に、約二〇〇〇名・約2キロにわたる行列は、順次、平安京の造営された延暦時代にさかのぼり、京都の歴史をしるばせる日本の歴史の縮図とも言える。葵祭、祇園祭とともに、京都三大祭の一つとして知られ、国内はもとより、海外からの参観者も多い。

今月の言葉

『只臨終の夕までの修行と知るべし』

上島鬼貫「独言」より

命を終えるその直前まで、心身共に鍛え磨き、生涯を歩め。人が生きるといふことは、成長するということである。体は衰えても、人間の心と知能は成長を続けることができる。ただし鍛錬を怠れば、停滞では済まずに衰えていく。万物が生ある年月を巻きもどすのは不可能だ。人生を前に進めるべく、己の魂を鍛え磨き続けるものは、強い意志と心を有する。経験と鍛錬は、大きな心の支えとなる。人生は自分の思うとおりにならない。しかし、逆境や苦難も、経験と鍛錬という支えがあれば乗り越えられる。

参考文献『神道のことば』武光 誠監
修 河出書房新社発行